



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	箴言における釈義上の問題（4） Exegetical Problems in the Book of Proverbs (4)
Author(s)	勝村 弘也（KATSUMURA Hiroya）
<i>Citation</i>	キリスト教論藻（KIRISUTOKYO RONSO）, No.35：1-15
Issue Date	2004
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# 箴言における釈義上の問題 (4)

勝村 弘也

## 1. はじめに

この論考においては、これまで詳細に検討することを留保してきた重要な用語を扱う。「好意」「好み」「お気に入り」等と訳されるヘブライ語のラツォーン (rāṣôn) は、新約のギリシャ語エウドキア (εὐδοκία) に対応する語であって、神学的にもきわめて重要である。しかしながら、従来の翻訳聖書の訳語にまったく統一性がみられない事実が示しているように、我が国ではこの語の思想的重要性がほとんど意識されていないように思われる。ドイツ語の場合は、訳語に Wohlgefallen や Gefallen が選ばれることが多い。ルター訳聖書<sup>(1)</sup>で Wohlgefallen が出てくる有名な箇所にはルカによる福音書2章14節がある。旧約では例えば詩篇30・8、145・16、箴言11・1、20等に名詞の Wohlgefallen が用いられ、レビ記1・3、22・19などでは wohlgefällig machen が使用される。レビ記1・4、22・23等の動詞  $\sqrt{\text{r-ṣ-h}}$  の訳語にも wohlgefällig machen、wohlgefällig sein が用いられる。J.S. バッハが作曲した有名なクリスマスの賛美歌に Ich steh an deiner Krippen hier 「まぶねのかたえにわれは立ちて」があるが、幼子イエスに捧げものをする「私」は, laß dirs wohlgefallen 「あなたが喜んで受け入れてくださるように」と歌う。この語が教会用語としていかに定着しているかを示す一例である。本論考においては、旧約におけるラツォーン の概念史を簡単にたどりながら、主として箴言での用法について考察する。

## 2. 旧約におけるラツォーン

2. 1. 旧約全体でのラツォーンの用例は、合計56回ある。Schrenk は、これらの用例を神が「気に入ること」「好意を示すこと」などの意味になっている場合と、人間が意志・感情・行為の主体になっている場合に大別する。Schrenk は、両者の用法をさらに以下のように細分化して検討している<sup>(2)</sup>。

### (1) 神に関する用法：

a. 神が犠牲を喜んで受け入れる場合などの用例として、レビ記19・5、22・19以下、イザヤ書56・7等を挙げる。マラキ書2・13の場合は、「(ヤハウエが)気に入ったもの」の意味であるが、これは別に検討を要する<sup>(3)</sup>。神が気に入るものの内容は犠牲ではないが、同じような用例として Schrenk は、箴言11・1、20、12・22、15・8を挙げる。さらに箴言10・32と11・27も神について明言されていないが好意の主体は神であると解釈する。これらの箴言での用例については、おおいに議論の余地があるので後で再考する。

b. 神の恵みや慈愛を一般的に表現する用法。詩篇5・13、30・6、8、51・20、106・4、イザヤ書60・10に加えて箴言8・35、12・2、18・22を挙げる。申命記33・23は、「ヤハウエの祝福」と並行して用いられている。詩篇145・16も神の恵みの業の意味にとる。Schrenk は、ルカによる福音書2・14との関連で、詩篇69・14、イザヤ書58・5など他の名詞と結合している用法に注目している。このような用法についても後で別に考察する。

c. 神の意志を表現する用例として、詩篇40・9と103・21を挙げる。しかし、これらをbとは別の項目に分類する明確な根拠があるようには思われない。

### (2) 人間に関する用法：

Schrenk の分類に従うと、人間がラツォーンの主体になっている用例は16回しかない。

a. 専制君主の勝手気ままのように「恣意」「偏愛」「好き勝手」の意味になるもの。創世記49・6、エステル記1・8、9・5、ネヘミヤ記9・24、37、ダニエル書8・4、11・3、16、36。

b. よい意味での人間の感情や行為としての用法。まず王の寵愛を意味するもの。箴言14・35、16・15、19・12に加えて、16・13（王の気に入ったもの）を数える。14・9も実直な者たちの間に起こる幸せを願う感情としてここに分類される。

c. 敬虔な者の神に向けられた意志ないし願い。詩篇145・19、歴代誌下15・15の2例を数える。

2. 2. 名詞ラツォーンは、動詞「気に入る」「好む」「満足する」（ラツォー $\sqrt{r-s-h}$ ）からの派生語であるとされる。ここでは、ラツォーンの用法と概念史を再検討する前に、旧約における動詞 $r-s-h$ の用法について見ておきたい。エヴェン・ショーシャンのコンコルダンスによると動詞の用例も同じく56回あるが<sup>(4)</sup>、この動詞には2種類あるとする説が有力である。KBLの第3版では、I $\sqrt{r-s-h}$ の他に、II $\sqrt{r-s-h}$ の項を立てその用例として、カル形5回、ニファル形1回、ピエル形1回、ヒフィル形1回を数えている<sup>(5)</sup>。これらの8例のうち、果たして何例までを実際にII $\sqrt{r-s-h}$ （以下、II類とする）に分類するのが妥当なのかに関しては、意見が分かれている。ピエル形での用例とされるヨブ記20・10を、GerlemanはII類に数えていないし<sup>(6)</sup>、最近出版された山我哲雄訳のレビ記<sup>(7)</sup>では、26・34の2例と26・43の1例を「享受する」と訳している。池田裕訳の歴代誌下<sup>(8)</sup>36・21も「享受する」となっている。これらを除外すると3例しかII類には残らない。これら3例は「罪責を償う」（レビ記26・41、43）「罪責が償われる」（イザヤ書40・2）ときわめて類似した用法になっている。Gerlemanは、動詞 $\sqrt{r-s-h}$ の基本的な意味は、annehmen「引き受ける」「受け取る」であると推定する<sup>(9)</sup>。たいていの場合、満足して受け取る、喜んで受け取るのような肯定的な意味になるのだが、稀に否定的な意味で「罪責を引き受ける」のような場合があると考えれば、この動詞には元々1種類しかないことになる。

普通、II類に属するとされる用例を除いて数えると、カル形での用例は42回ある（箴言23・26のケティブも数える）。目立って多いのが詩篇の13回である。以下に該当箇所を列挙する。詩篇40・14、44・4、49・14、50・18、

51・18、62・5、77・8、85・2、102・15、119・108、147・10、147・11、149・4。これらの箇所を数種類の日本語訳聖書で逐一当たってみると、ほとんど絶望的なほど訳語が分散しているから、原典と照合してみないかぎり、問題の動詞ラツァーがどこにあるのかが分からない。この動詞が本文にあることを無視しているような訳もかなり存在する。松田伊作訳<sup>90</sup>にはさすがにこのような見落としはないが、多くの場合訳語に「顧みる」を当てている。残念ながら適当な訳語とは思われない。ルター訳で当たってみると *gefallen*、*Gefallen haben*、*Wohlgefallen haben* などの訳語がすぐに目に飛び込んでくる。日本語に訳す場合、素直に「気に入る」「受け入れる」「喜ぶ」などとすれば、簡単に訳せるはずである。カル形での用法については、以上でおおよその見当はついた。他の用法で注目されるのは、祭儀用語としてのニファル形での6例である。これらはすべてレビ記に見られ、山我哲雄訳では「受け入れられる」と適切に訳されている（1・4、7・18、19・7、22・23、25、27）。

*Gerleman* は、動詞ラツァーの基本的な語義として「受け取る」「引き受ける」を推定するが、これは元来、分捕りものや相続の分け前を受け取るような場合に用いられたのだとする（口語訳聖書の詩篇49・13 [マソラ14]「自分の分け前を喜ぶ者どもの果てである」を参照）。このような受け取りは、たいてい受け取った者に満足、喜びをもたらすから、肯定的な評価がこの動詞には付加されることになり、「享受する」から「気に入る」「満足する」の意味に転じた。しかし、「罪責を引き受ける」のような表現も不可能ではなかった<sup>91</sup>。「受け取る」に肯定的な意味合いが強いことから、この動詞は神が捧げものを「受け入れる」場合の祭儀用語として盛んに使用されるようになったのであろう。以上の考察をふまえて名詞のラツォーンについて再考する必要がある。

2. 3. 名詞ラツォーンの用例を通覧してすぐに気づくのは、この語の用例がバビロン捕囚以後のテキストに偏っているように思われる点である。56例のうち第二、三イザヤが6回、ダニエル書4回、エステル記2回、ネヘミヤ記2回、マラキ書1回、エレミヤ書1回、エズラ記1回、歴代誌下1回と確

実に捕囚期以降の文書に18回用例がある。モーセ五書の用例は、レビ記7回を含めて合計11回である。他には詩篇13回、箴言14回となっている。詩篇の各篇の年代推定は容易ではないから、ここでは判断を保留しなければならない。確実に王国時代と推定される用例は、箴言の中の格言などに見つけられるだけである。

この語が用いられた生活の座 (Sitz im Leben) としては、祭儀と宮廷が考えられる。すでに見たように神がラツォーンの主体である用例は、数が多いが、このことはこの語が最初から神学的用語として用いられたことにはならない。Schrenkが(1)bとcに分類したような一般的な神の「恵み」「寵愛」「意志」を表現するような用法は、この語の発展の歴史の遅い時代に位置づけられるであろう。

動詞ラーツァーが「気に入る」「好む」「満足する」の意味に転じたことから、宮廷用語としてのラツォーンが派生したのではないか。ここで問題になるのは、まず王のラツォーンである。これは王が「喜んで受け入れること」「気に入ること」「気に入るもの」をさすとともに、王が臣下に示す「寵愛」をも意味した(次節参照)。王が専制的に振る舞えば、これが「好き勝手」「好き放題」の意味に転じるのは当然である。旧約の遅い時代の文書であるネヘミヤ記、エステル記、ダニエル書での用例がこれを示している。なおラツォーンは、王に限らず人々に好感をもたらすものをも意味したはずである。

祭儀用語としてのラツォーンは、「受け入れる」を意味する動詞ラーツァーから派生したと考えられる。このような犠牲を「(神が)喜んで受け入れること」としてのラツォーンと、宮廷用語としてのラツォーンのどちらが先に発生したのかを問うてもあまり意味はないであろう。神に関する用語と王に関する用語は、古代オリエン特世界ではしばしば相互に重なり合うからである。いずれにせよ、ラーツァー(ニファル形)もラツォーンも祭司文書では祭儀に関する専門用語になっている<sup>42</sup>。ここでは恣意性は問題にならない。厳密に規定にかなった犠牲だけがヤハウエに受け入れられるとされるからである。レビ記におけるこのようなラツォーンの利用としては、1・3、19・5、22・19、20、21、29、23・11がある(イザヤ書56・7、60・7、マラキ

書2・13をも参照)。

ラツォーンには、詩篇145・19のように「願ひ」の意味になる用例がある。これは宮廷において王の気に入ることばがラツォーンであったこと(箴言16・13)や神に捧げられて受け入れられる犠牲がラツォーンであったことから派生したものであろう。このような意味の推移は死海文書にも見られるが、ここでは述べない<sup>4)</sup>。

### 3. 箴言におけるラツォーンの用法

3. 1. 箴言には合計14の用例があるが、8・35以外のすべての用例が10章以下の「ソロモンの第一詞集<sup>4)</sup>」に集中している。この文学集成は、基本的に王国時代の格言からなると推定されるから、ここにラツォーンの古い用法が見られると考えてよい。最初に王に関する以下の4つの用例を考察する。16・13と15の場合は、前後の文脈を考慮して12節以下を訳す。なおラツォーンの訳語にはく 〉を付けた(以下同様)。

賢明なしもべには、王の〈好意〉。

だが、恥をさらす者には、王の憤り(14・35)。

邪悪な行いは、王の嫌悪するもの。

まことに、義によって王座は堅く立つ。

義しい唇は、王の〈お気に入り〉。

率直に語る者を、彼は愛する。

王の憤りは、死の使い。

だが、賢いひとは、彼をなだめる。

王の顔の光には、いのちがある。

彼の〈好意〉は、春の雨の雲のようだ(16・12・15)。

王の憤激は、ライオンのうなり声のようだ。

だが、彼の〈好意〉は、青草の上の露のようだ(19・12)。

原則として「喜んで受け入れる」の意味が強い場合には、「お気に入り」と訳し、王から出て来る寵愛、恵みのような意味が強い場合には「好意」と訳すことにしたが、14・35のような場合にはどちらとも決めかねる。

旧約の知恵は、第一に実践的知恵であり、政治的領域と深く関わっていた。その意味で宮廷は知恵のひとつの中心であった。王が社会正義の遂行者と考えられていたことを16・12～13は示す。先に「箴言における釈義上の問題(2)」で見たように、箴言16・1～15では、〈ヤハウエに関する格言〉と〈王に関する格言〉が相互に融合するような形で結びついている<sup>44</sup>。まず、13節のラツォーンが12節の「嫌悪するもの(トーエバー)」と対立関係にあることが注目されるが、16章冒頭の一連の〈ヤハウエに関する格言〉にも5節に「ヤハウエの嫌悪するもの」という表現があって呼応している。内容的にも5節では「心の驕り高ぶる者」が問題になっており、12節の内容と相互補完的な関係にある。16章の〈ヤハウエに関する格言〉にはラツォーンは見当たらないが、7節には動詞ラーツァーの不定詞を用いて「ヤハウエが気に入るときに」の表現がある。なお、13節のラツォーンは、「愛する(ʿ-ḥ-b)」と並行関係にある。

14・35と19・12では、王のラツォーンが、王の「憤り」「憤激」と対立関係にある。ここでは王のご機嫌が問題になっており、このような古い時代の用例でもラツォーンの恣意性が伺われて興味深い。いずれの用例でも「喜んで受け入れること」という元の意味から大きく外れていないが、好意と訳した3例では、王が好意を向ける対象は臣下である。

3. 2. 次にラツォーンの主体がヤハウエである場合について見る。「ソロモンの第一詞集」に以下の6回の用例がある。

偽りのはかりは、ヤハウエの嫌悪するもの。

だが、正しいおもりの石は、彼の〈お気に入り〉(11・1)。

心の曲がった者は、ヤハウエの嫌悪するもの。

だが、まっすぐに道を歩む者は、彼の〈お気に入り〉(11・20)。



善人は、ヤハウエからの〈好意〉に出会う。

だが、謀略家は有罪とされる (12・2)。

偽りの唇は、ヤハウエの嫌悪するもの。

真実を行なう者は、彼の〈お気に入り〉 (12・22)。

邪悪な者どもの犠牲は、ヤハウエの嫌悪するもの。

だが、実直な者たちの祈りは、彼の〈お気に入り〉 (15・8)。

〔良い<sup>94</sup>〕 妻を見いだした者は、良いものを見いだしたのだ。

彼はヤハウエからの〈好意〉に出会ったのだ (18・22)。

すぐに気づくのは4例で「彼のお気に入り」が「ヤハウエの嫌悪するもの」と対立関係に置かれていることである。ここで「嫌悪するもの(トーエバー)」について説明する<sup>94</sup>。この語は旧約全体で117回もの用例がある。申命記文書やエゼキエル書(43回)での用例が多いが、箴言でも10回用いられている。祭儀用語として使われることが特徴的であり、偶像礼拝(申命記7・25以下、列王記下23・13、エゼキエル書8・13以下、16・36)、性的タブーを犯すこと(列王記上14・24)、子供を犠牲として捧げること(申命記12・31)などがトーエバーとされている。これらの用例は、この語が「被廉恥」のようなきわめて強い否定表現であることを示している。トーエバーは、まず祭儀の領域でヤハウエに受け入れられないことであったが、エゼキエル書の用例が示しているように、預言書では日常生活における倫理的行為が問題になっている。箴言では、預言者の思想の影響を受けてであろうか、度量衡のごまかし(11・1、20・10、23)<sup>94</sup>、嘘偽り(12・22、26・24以下)、驕り高ぶり(16・5)、ほら吹き(24・9)、正義に反する判決(17・15)などがトーエバーとされる。

11・20の「心の曲がった者」という表現の意味は、明瞭ではないが、卑劣な行為をする者の意味であろう。15・8の格言にも、預言者の祭儀批判の影響が認められる。日常生活において弱者を抑圧するなど正義を踏みにじるような行為をしている者の犠牲の捧げものをヤハウエが受け入れないことを語っているのである。

18・22では、ラツォーンがほとんど「人を喜ばす良いもの」の意味になっている。このようなラツォーンは、人間から神にではなく、神から人間に来るのである。

8・35は捕囚後のテキストであり、女性として人格化された知恵が「私」として人々に語っている。良い妻について語っている18・22と比較すると特に後半がきわめて似ている。ここでは知恵と「いのち」とラツォーンが並行関係にある。

まことに、私を見いだす者は、いのちを見出す。

ヤハウエからの〈好意〉に出会ったのだ(8・35)。

3. 3. ラツォーンとトーエバーが並べられている多くの用例に当たってみると、これらの語が祭儀用語としての響きをいつまでも失わなかったのではないかとの感をもつ。このことは、ラツォーンが〈人間から神に〉送られるものとしての性格と〈神から人間に〉送られるものとしての性格という一見矛盾する両面をもつことと関係するように思われる。元々、人が犠牲の獣を神に捧げて受け入れられるという祭儀の場は、神と人との交流の場なのであり、互いに満ち足りて喜ぶ場なのである<sup>10)</sup>。われわれ現代人には理解が困難であるとしても、レビ記が記しているような祭儀の規定は、そのような喜ばしい交流を保証するためのものなのである。キリスト教会における礼拝も祈りを捧げる行為自身が神と人との出会いであり交わりなのであり、人が神からのラツォーン（喜び、満足）を受け取る場なのである。このように考えると、ラツォーンが〈人間から神に〉と〈神から人間に〉の双方性を持つことが了解されるであろう。

3. 4. 以上で箴言での用例14のうち11例について考察した。残っているのは10・32、11・27、14・9の3例である。

義人の唇は、〈満足〉を湧き出す。

邪悪な者どもの口は、ねじれている (10・32)。

善を欲しがる者は、〈好意〉を探している。

だが、悪を追い求める者には、それがやって来る (11・27)。

愚か者たちは、償いの供犠を嘲る。

だが、実直な者たちの中には、〈満足〉がある (14・9)。

Schrenk は、10・32、11・27のラツォーンの主体を、明言されてはいないが神であるとしている<sup>例</sup>。義人の語ることばが、神に喜ばれるものであり、善を求める者が、神からの好意を期待していることになる解釈して問題はない。しかし、注解者たちの意見は、ラツォーンの主体が神か人かで分かれている<sup>例</sup>。まず10・32から考える。ここには「湧き出す」という表現がある。義人のことばが泉に喩えられている格言が他にあるから、これらとの関係で考察するのが適切であろう。「義人の口は、いのちの泉。だが、邪悪な者どもの口は、暴虐を隠す」(10・11)。「人の口のことばは、深い水。湧き出る流れ、知恵の泉」(18・4、13・14をも参照)。パレスチナのような乾燥地では、泉は共同体の中心であり、人間も家畜も鳥もいのちはそこから湧き出る水にかかっている。義人の語る知恵のことばは、泉の水のように共同体のいのちにかかわるといのが、これらの格言の言わんとするところであろう。10・32をこのような格言との関連で理解すると、「義人の唇」が周囲の人々に泉から湧き出る水のように大きな喜びをもたらすと言う意味であることが分かる。11・27の後半の「それ」は「悪＝災い」を受ける。ラツォーンは、一応「好意」と訳したが「喜びをもたらす良いもの」の意味もあるだろう。善行をなす人が、人々の好意を得るという解釈が一応なりたつが、神に喜んで受け入れられるという意味を排除するものではない。「災い」も究極的には神から来るからである。

知恵が直接的に祭儀に言及するのは稀であるが、14・9の前半は「償いの供犠」を問題にする。このことから考えると「実直な者たち」は、たとえ神への「償いの供犠」を捧げる場合でも、互いに喜ばしい交わりをする礼拝を経験するというのであろう。ここでは人間相互の交流が問題になっていると

言えるが、このことが可能になるのは供え物が神に受け入れられるからである。

#### 4. ラツォーンが他の名詞と結合している用法

箴言とは直接関係がないが、詩篇とイザヤ書にはラツォーンが他の名詞と結合して複合観念を形成している用法がある。このような用法は、ルカによる福音書2章14節のエウドキアの用法を解釈するときの鍵ともなるので、ここでついでに考察しておく。問題の用法は、詩篇69・14、イザヤ書49・8、58・5、60・7、60・10、61・2の6箇所ある。いずれも翻訳者が苦勞して訳している箇所である。ただし、60・7には正文批判の立場から問題があるのでまずこれから見ておく。マソラを直訳すると、「私の祭壇のラツォーンの上に、彼らは揚げる」となる。「揚げる」とは、燔祭の煙を立ち上らせるの意味であるが、「私の祭壇のラツォーンの上」という表現は、どう考えても不自然である。クムラン出土のテキストから「私の祭壇の上にラツォーンとして」（イザヤ書56・7と同一の表現）という読み方が見つかっており、七十人訳などもこれを支持するからこちらが正文であると考えてよい。この場合のラツォーンは、「神に受け入れられる犠牲」の意味になる。テキストの変更によって、60・7が問題の用法から除外され、5例が考察の対象として残る。これらについて、問題の聖書の箇所にラツォーンを訳さないままでの逐語訳を付け、いくつかの英語とドイツ語の訳文を適宜参照して整理すると以下のようなになる。なおL. はルター訳、Z. はチューリヒャー聖書、RSV は Revised Standard Version、NKJV は New Kings James Version である。

詩篇69・14 「ラツォーンの時」

zur Zeit der Gnade (L.); zur Zeit, da es dir wohlgefällt (Z.);

at an acceptable time (RSV); in the acceptable time (NKJV)

イザヤ書49・8 「ラツォーンの時」

zur Zeit der Gnade (L.); Zur Zeit der Huld (Z.);

In a time of favour (RSV); in an acceptable time (NKJV);

In a favorable time (WBC)<sup>(2)</sup>

イザヤ書58・5 「ヤハウェにとってラツォーンの日」

einen Tag, an dem der Herr wohlgefallen hat (L.);

an acceptable day to the Lord (NKJV);

a day acceptable to Yahweh (WBC)

イザヤ書61・2 「ヤハウェにとってラツォーンの間」

ein gnädiges Jahr des Herrn (L.);

the acceptable year of the Lord (NKJV);

the year of Yahwe's favor (WBC)

イザヤ書60・10 「私のラツォーンにおいて」

in meiner Gnade (L.);

in my favour (RSV); in my favor (NKJV, WBC)

それぞれの翻訳聖書に必ずしも整合性があるわけではないが、ルター訳とNKJVにはかなり明瞭に傾向が認められる。ルター訳はこのようなラツォーンをGnade（神の恵み）として把握し、NKJVは人間の捧げるものが神に受け入れられることとして把握する。つまりどちらの解釈も成立するのがこのようなラツォーンの基本的な性格なのだとも考えられる。先に考察したように、ラツォーンは特に祭儀においては神と人との交わりの場に出現する喜びとしての性格を持ち、双方向的である。神から人への方向を強調すれば、「恵み」となるが、人から神への方向を強調すれば「受け入れられる (acceptable)」という訳語が当てられることになる。いずれにせよラツォーンの双方向的な性格が、このような用法において確認されるのである<sup>(2)</sup>。

## 注

- (1) 本稿で言うルター訳聖書は、Deutsche Bibelstiftung, Stuttgart から1963年に刊行されたものをさす。
- (2) G. Schrenk, Art. εὐδοκίω, Theologisches Wörterbuch zum NT II, 741.

- (3) 直訳すると「お前たちの手からラツォーンを受け取ることはない」という表現がある。受け取るべきなのは神である。ここでは供え物がラツォーンと言い換えられている。このような用法は、「願い」の意味に近い。
- (4) Abraham Even-Shoshan, *A New Concordance of the Bible*, Jerusalem (1983) 1090.
- (5) Koehler / Baumgartner, *Hebräisches und Aramäisches Lexikon zum AT*, Dritte Auflage, Lieferung IV, E.J. Brill (1990) 1195.
- (6) G. Gerleman, Art. *ršh* Gefallen haben, in: Jenni / Westermann, *Theologisches Handwörterbuch zum AT*, Bd. II, München und Zürich (1976) 810.
- (7) 山我哲雄訳「レビ記」『旧約聖書 II』岩波書店 (2000年)
- (8) 池田裕訳「歴代誌」『旧約聖書 XV』岩波書店 (2001年)
- (9) Gerleman, a.a.O., 810.
- (10) 松田伊作訳「詩篇」『旧約聖書 XI』岩波書店 (1998年)
- (11) Gerleman, a.a.O., 811.
- (12) G. von Rad, *Theologie des Alten Testaments Bd. I*, Chr. Kaiser Verl. München (1978) 274. G・フォン・ラート著／荒井章三訳『旧約聖書神学 I』345頁参照。
- (13) 例えば、1 QS 9, 13. 15. 23のラツォーンは、神の「意志」を表現していると解釈される。
- (14) 箴言10・1・22・16。
- (15) 『キリスト教論藻』第33号 (2002年3月) 23頁。
- (16) 「良い」は翻訳に際して補った語である。
- (17) E. Gerstenberger, *t- 'b pi. verabscheuen*, in: Jenni/ Westermann, a.a.O., 1051-1055. を参照した。トーエバーとラツォーンの対立関係については, Jutta Hausmann, *Studien zum Menschenbild der alteren Weisheit*, Tübingen (1995) 261ff. 参照。
- (18) =注(15)29頁参照。
- (19) 祭儀と義と連帯の関係については、勝村弘也著『旧約聖書に学ぶ』日本キリスト教団出版局 (1993) 75頁参照。

(20) =注(2)

(21) 使用した注解書に関しては、『キリスト教論藻』第26号（1994年3月）38頁のリストに加えて、R.N.Whybray, Proverbs: NCBC（1994）; Arndt Meinhold, Die Sprüche: ZBK（1991）をあげることができる。

(22) J.D.W. Watts, Isaiah 34-66: Word Biblical Commentary（1987）292. 等参照。

(23) =注(22)。

(24) 新約における動詞エウドケオーとエウドキアの用法については、いつか稿を改めて論じたいが、この紙面を利用して、福音書における若干の用法についてのみ簡単に論じておく。

新約において動詞のエウドケオーが用いられている重要な箇所にもマルコによる福音書1章11節がある。ここはイエスがヨハネから洗礼を受けたときに、天から声があったとされている箇所である。新共同訳は以下のように訳す。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（口語訳聖書も大差はない）。しかしここをネストレーアラン編集のギリシャ語テキストから訳すと「お前はわたしの愛する子、お前をわたしは気に入った」である。ルター訳では、*Du bist mein lieber Sohn, an dir habe ich Wohlgefallen.* となっている。問題は後半の「お前をわたしは気に入った」の部分であるが、マタイによる福音書の並行箇所3章17節のギリシャ語本文はマルコとは少し違っている。ところが不思議なことに新共同訳の訳文はマルコの場合とまったく同じである。どちらの訳文にも合格点は付けられないが、特にマルコの場合はほとんど誤訳である。これは基本的には翻訳者の「学力」の問題であるが、神が特定の間人——ここではイエス——を「気に入った」「好きだ」とするような表現が、翻訳者の神観念に合わないために聖書が素直に読めないで起こった誤訳なのだとも言える。このような問題は、おそらく非常に根が深い。聖書に特有のセム的な感性からすると、神が特定の間人を「好きだ」とか「気に入る」とするのに何の問題もありはしない。もともと神の愛とか神の選びとか言う表現には、この種の問題が付いて回っているのである。ところが「神の御意志」とか「神の御心」などのようなソフトな表現にすると、抽象的表現になる分だけ問題が見えにくくなる。しかし聖書は、生身の間人と神との

人格的な関係を表現しているのである。

新約における名詞のエウドキアの用法は、旧約のラツォーンの強力な影響を考慮しないでは理解することができない。ラツォーンは、1世紀のパレスチナでは神学的術語となっていたと思われるが、この語をギリシャ語に置き換えた場合のひとつにエウドキアがあった。エウドキアにどのような訳語を当てるのが適当であるかは、即座には答えられないが、新約での用法にはほとんどの場合、旧約的な意味で神に気に入られて受け入れられることの意味が保持されている。また、ラツォーンの場合と同じ双方向性が問題になる。

マタイによる福音書11・26（ルカ10・21と並行）は、Qからの引用であるが、日本語ではふつう「これは御心に適うことでした」のように訳される。しかし原文の感じはまったくセム的であって、直訳すると「このようにして、あなた（＝父なる神）の前でエウドキア（＝ラツォーン）が起こったのです」である。この場合のエウドキアは、神と人との喜ばしい交流の意味であり、「福音」の意味とも近いように思われる。

ルカによる福音書2章14節後半のクリスマスのメッセージもまたきわめてセム的である。ここにパレスチナの原始教団の福音理解が読み取れる。口語訳聖書では「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」となっている（新共同訳も同じような訳文であるが、わざわざ「人々」を「人」に改悪している。ひどい学力不足である）。「み心にかなう人々に」は、エン・アンスローボイス・エウドキアスの訳であるが、このような複合名詞の作り方がセム的であることが指摘されている。これをヘブライ語に置き換えると、レアンシェー・ラツォーンである。「ラツォーンの人々に平和があるように」という文から考えてみると、ここにはまず、神に受け入れられる人々、神さまに気に入られる人々の意味がある。それは神の恵みを受ける人々でもある。さしあたりはお告げを受けた羊飼いたちということになろう。しかしまたここには神との喜ばしい交流に入る人々という意味がある。そうであるからこそ、羊飼いたちは、わざわざベツレヘムにまで出かけていってメシアの誕生を見に行っただのである。このような人々に平和があるのである。